

あそびゼミナール開講

—かわいい子には多様な体験活動を—

北濱幹士^{*1}，岡田成弘^{*2}，知念嘉史^{*2}

^{*1} 東海大学スポーツプロモーションセンター

^{*2} 東海大学体育学部生涯スポーツ学科

概 要

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行により私たちは行動変容が求められ，多くの社会活動の実施が見送られた。この行動変容には，他者との接触の減少や人が集まる集会やイベントの制限等が挙げられる。この行動変容によって，子どもにとって非常に大切な「友達と遊びながら社会性等を身に付ける」機会が失われてしまった。また，これらの制限により，子どもと一緒に「遊ぶ」といった諸活動を通じて，培っていた遊びや運動・スポーツ等の実学が実施困難となり，「遊び」を伝える指導者（リーダー）の育成も停滞してしまった。

約3年続いた「ウィズコロナ」から「アフターコロナ」，つまり，コロナ禍からの正常化を見据えた活動として，学生を中心に地域の子どもと遊びを通して身体を動かす楽しさを今一度体験してもらう機会として「あそびゼミナール」を開講することとした。

本稿では，遊びの必要性について述べた後，「あそびゼミナール」の実施報告，及び参加学生の感想，最後に今後の活動について一考する。

^{*1} 東海大学スポーツプロモーションセンター

^{*2} 東海大学体育学部生涯スポーツ学科

1. はじめに

子どもは、「遊び」を通して心や体を育てている。同年代の子どもとの「遊び」は勿論のこと、歳の離れたお兄さん・お姉さん、或いは両親や小父さん・小母さん、更には祖父や祖母を含む高齢者など、様々な世代の人たちと「遊び」を通じた交流でコミュニケーション能力を養うことができる（神代，2012）。子どもたちの心身の成長を促す要素は様々であり，遊具（ボールなど）を使って遊ぶことでそれらの特性を考えて遊ぶ「理解する力」，繰り返し練習して遊ぶ「忍耐力」，できるようになる成長の「喜びと自信」，夢中になって遊ぶことで広がる「仲間の存在感」，もっと上手になろうとする「意欲」などが挙げられる。また，自然を生かした遊びでは，春夏秋冬の季節感，四季に基づいた草花や昆虫などに触れることができる（神代，2013）。しかし，実際にそれらの要素を享受するためには，大人の支援，或いはその機会を作り・持つことが重要な場合もある。社会環境の変化（少子化，都市化など）を背景に「遊び」の機会が全国的に減少し，望ましい動作能力や運動能力の発達が阻害されている（子どもの発育・発達に及ぼす公園の利用に関する研究，2015）。

新型コロナウイルス感染症（以後，COVID-19）の流行により多くの社会活動の実施が見送られた。子どもの生活習慣の変更が必須となり，「遊び」も変化が求められた。外出自粛要請により屋外で遊ぶ時間が極端に減ると共に，人との接触が求められ，自宅でのメディア時間（テレビ、コンピューター、ゲームなど）が屋外で遊ぶ時間の代わりとなった（近視予防フォーラム，2020年）。つまり，子どもの成長に欠かすことのできない「友達と遊ぶなかで様々な経験をし，社会性を身に付ける（遊び）」がCOVID-19の諸対策によって欠落してしまったのである。

子どもの時分，家庭では「家族行事」や「お手伝い」，地域では「友だちとの外遊び」，学校では「各種実行委員」や「部活動の部長や役員」といった体験が大切である事が報告されている（国立青少年教育振興機構，2018）。つまり，様々な場所・場面における多種多様な子どもの体験活動は人生を豊かにする基盤であり，「生きる力を育む糧」であると言える。

「遊び」で重要な事柄の一つに，「お兄さん・お姉さんと一緒に遊ぶ」と言うことがある。同年齢の友達や，家族とは違った人たちと「一時的に一緒に遊ぶ」という事柄は印象深い体験として子どもたちの中で育まれる。つまり，「お兄さん・お姉さんと遊んだ」といった体験を繰り返すことで「お兄さん・お姉さんと一緒に遊ぶ」楽しみ・楽しさが意図的に受け継がれて行くことにもなる。しかし，先述した通り COVID-19 の行動変容により，「お兄さん・お姉さんと一緒に遊ぶ」こともできず，長い年月に渡り継続されていた良き循環が停滞してしまったと言えるであろう。また，子どもたちに大切な「遊び」を伝える青少年・少女（お兄さん・お姉さん）も，子どもたちと「遊ぶ」という経験を COVID-19 によって失ってしまったのである。そこで，筆者らは東海大学体育学部生涯スポーツ学科の学生を中心に，地域の子どもの遊びを通して身体を動かす楽しさを今一度体験してもらう機会として「あそびゼミナール」を開催す

る事とした。「あそびゼミナール」の名称は、小学生も親しみやすいように「あそび」をひらがな表記とし、学生と教員が共に遊びの活動をすることを踏まえて「ゼミナール」を付記した。

本稿では、コロナ禍における「遊びの欠落」及びその必要性について確認し、「あそびゼミナール」の実施概要及び参加学生の感想及び要望、最後に今後の活動について述べる。

2. 「あそびゼミナール」の方法及び目的

「あそびゼミナール」開講の目的は、大学生の学びと地域の子どもたちの遊びの機会の創出である。企画運営の中心学生は、東海大学体育学部生涯スポーツ学科の知念・岡田ゼミの学生が担当し、運営サポートは、生涯スポーツ学科の学生及び東海大学スポーツ社会貢献プロジェクトの学生が担った。なお、アドバイザーとして筆者らも参加した。

1回の参加募集人数は20名程度とし、対象者は近隣の小学校3～6年生とした。また、小学校1～2年生の弟妹が参加を希望する場合は、小学校3～6年生の兄姉が一緒にいれば参加可とした。なお、参加者は、本企画の発起人でもある岡田・北濱の子ども及びその友人を中心に機縁法（口コミ）で募ることとした。

開講日（実施日）は、参加者の習い事が少なく、大学の授業が行われていない日曜日の午前中とし、実施場所は豊富な施設が使用可能な東海大学湘南キャンパスとした。また、参加者・保護者・大学生・教員の負担にならないよう、授業期間内の月1回を開講予定とした。

開催要項には下記の文言を添付し、「あそびゼミナール」の開催趣旨を各保護者に理解してもらった上で参加申し込みをしてもらった。

あそびゼミナールの趣旨

「あそびゼミナール」は主に体育学部生涯スポーツ学科で幼児体育や野外教育を専攻する学生が中心となり、企画運営をいたします。身体を動かす楽しさを感じてもらうための活動ですので、運動や体育に自信がなくても大丈夫です。体育学部のお兄さんお姉さんと目一杯身体を動かして遊んでもらいたいと思います。

教員もこの企画にアドバイザーとして参加いたしますが、学生の主体的な関わりを重視したいと考えています。そのため拙い運営や進行があるかもしれませんが、温かい目で見守っていただけますと幸いです。

現在は、口コミのみで参加者を集めております。もしお友達をお誘いしたい場合、「小学3～6年生」「兄弟参加の場合、小学1～2年生も可（ただし、必ず小3～6の兄姉同伴）」という条件でお誘いください。

ご不明な点は、知念・北濱・岡田にお問い合わせください。

3. 「あそびゼミナール」の実施

3.1 第1回あそびゼミナール@パレット

第1回目の「あそびゼミナール」は、2023年6月25日(日)に東海大学内の芝生広場 Palette (パレット) にて開催した。参加者は1年生から6年生までの男女21名であった(表1, 2 参照)。当日の企画は先述した通り、知念・岡田ゼミの学生が中心となり、人間知恵の輪、ナビゲーションゲーム、しっぽとり、キックベースの準備をした。しかし、参加者の年齢差が1~6年生と大きかったこと、また、午前中より日差しが強く気温も上昇していたため、急遽、企画内容を変更して実施した。

実際に行ったプログラムは、大学生の自己紹介の後、自己紹介ゲーム、しっぽとりであった。1回目と言うこともあり、約半分の時間は、自由遊び(サッカー、バドミントン、モルック、フラフープ等)を行った。

3.2 第2回あそびゼミナール@プール

第2回目は、2023年7月16日に大学内のサブプールにて水遊びを実施した。参加者は、1回目より2名少ない19名であった(表1, 2 参照)。実施概要は、集合・更衣、プール内にて水遊びに関する諸注意を行った後、体操、水慣れ、そしてプール内での活動であった。

使用したプールはサブプールではあるが、水深が140cmであったため、プールフロアを沈めてプール内を歩けるようにし、プラスチックボール、プールヌードル(浮き棒)、ビート板を遊具として準備した。また、プールフロアを斜めに設置した滑り台、プールフロアを数段重ねたジャンプ台などを用意した。また、怪我・事故防止のため、大学生3名・教員2名が水上からの監視を行い、他大学生・教員はプール内に入り、滑り台やジャンプ台、そして子ども達の補助と担当を明確化した。

参加者の泳力レベルが不明であったため、ライフジャケットやアームリングの持参・使用を推奨すると共に準備をしたが、使用する参加者は皆無であった。泳力に自信がないと見受けられた参加者の多くはプールヌードル(浮き棒)を使用し、浮かび流されることを楽しんでいた。

表1 「あそびゼミナール」開講状況

	第1回 6月25日(日) 10時~12時	第2回 7月16日 9時15分~11時15分
参加者	21名	19名
参加学生	13名(3名 ^{*1})	12名(5名 ^{*1})
実施場所	芝生広場 Palette (パレット)	15号館 サブプール
活動概要	芝生での外遊び	プールでの水遊び

*1: スポーツ社会貢献プロジェクトからの参加学生数

表2 「あそびゼミナール」参加者区分（男女・学年別）

	性別	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
1回目	男児	2	0	5	0	3	2	12
	女児	1	1	4	2	1	0	9
	合計	3	1	9	2	4	2	21
2回目	男児	2	0	5	1	3	0	11
	女児	1	1	1	3	0	2	8
	合計	3	1	6	4	3	2	19

4. 参加学生からの感想

4.1 生涯スポーツ学科

全2回「あそびゼミナール」に参加した生涯スポーツ学科知念ゼミの4年次生2名（AさんとBさん）及び岡田ゼミ4年次生1名（Cさん）に、1) 参加した理由、2) 参加した感想、3) 今後に期待することについて質問を行った。

Aさんは、1) 高校生の頃から将来子ども達に運動を教える仕事に就きたいと考えていた。大学生活では幼児を対象とした様々なプログラムに参加してきた。しかし、小学生以上と関わるきっかけがなく困っているところ、この活動が始まり参加することにした。2) この活動ではプログラムの企画から当日の運営まで学生のみで行った。最近の小学生がどんな遊びに興味を持つのか、飽きさせないためにどんなアレンジを加えて遊ぼうか考えるのが少し難しかったが、もっと遊びに変化を加えるのを上手になりたいと感じた。また、久しぶりの小学生の相手で少し緊張していたが、回を増すごとに覚えていくくれたり、心を開いてくれたりして、とても楽しく活動に参加することができた。3) 今後はこの活動だからできることをより子供達に提供していけるようになりたい。今の子供達が知らない遊びを行ったり、沢山学生がついているからこそできるプログラムを行っていききたい。

Bさんは、1) 私自身、小学生の時にこういった活動に参加して遊ぶことの楽しさを知ることが出来た経験から、その楽しさを次に繋げたいと考えたため。また、人前に出て話すことが得意ではない自分を変えることができるきっかけになると考えたため。2) この「あそびゼミナール」では、段取りや遊びを考える等の運営は学生を主体として行っている。第一回目の活動では全体のまとめ役を担当し、気温や参加者の反応を見ながら活動内容を変更や時間の調節をするなど難しい点もあったが、自身の成長につながる貴重な体験だった。また、怪我や体調不良者を出さないようにするなど気を配る場面も多く大変であったが、参加者が楽しんでいる姿や「楽しかった」という言葉を聞いて安心と同時に達成感を感じることができた。3) ①ニュースポーツを取り入れる等、より楽しむことができる活動にしたい、②大学という環境を生かした

普段することの出来ない遊びや活動を行いたい、③川遊びやキャンプなど学外での活動も行いたい。

Cさんは、子どもが苦手であり関わりたくないと思っていた。しかし、あそびゼミナール以外で子どもとの深いかかわりを持てる機会があり、そこで接し方や話し方を学んだ。この経験を活かしたいと思い参加した。また、誰とでも話せる、伝えたいことを言葉にして伝えられるコミュニケーション能力をつけたいと思ったから。2) 参加してくれた子どもたちは、人見知りの子や静かな子はいなくて活発で元気の良い子たちばかりでとても接しやすかった。どの子どもも私たちが作った遊びに積極的に全力で遊んでくれたことが嬉しくて、笑顔に向けてくれて、一緒になって楽しむことができた。また、時間が経って子供たちも慣れてきたころ、子供たちから私の方に来たり、名前を呼んでくれたことが自分で思っていた以上に嬉しく、よりコミュニケーションを取りたいと思えた。この経験を活かし、今後も更に多くのコミュニケーションを取れるようにし、参加者全員の笑顔を作りたいと思う。3) ①遊び慣れていない子どもたちに外でできる簡単で楽しい遊びを知ってほしい、②大学生の参加者をもっと増やして、子ども对大学生というような遊びも取り入れたい。

4.2 スポーツ社会貢献プロジェクトより参加した学生

全2回「あそびゼミナール」にボランティア参加したスポーツ社会貢献プロジェクト（以後、スポ社）所属の学生（法学部法律学科2年次生のDさん）に、1) 参加した理由、2) 参加した感想、3) 今後に期待することについて質問を行った。

1) の「あそびゼミナール」に参加した理由は、子どもの接し方が分からず、苦手意識を持っていたが、昨年のグローバルフェスタをきっかけに子どもたちと遊ぶのが楽しいと思い始め、もっと子どもたちと遊んで苦手意識を克服したいと考えたからである。また、子どもと関わることの多いスポ社の今後の活動や将来の夢に活かせるものを得られると考えたからである。

次に2) の参加した感想であるが、参加してくれた子どもたちは、活発な子が多く何にでも興味を示してくれたので、スムーズに遊ぶことができたと思う。そのおかげで、自分も子どもたちと一緒に全力で遊ぶことができてとても楽しかった。また、子どもたちからの「楽しかった」という声や笑顔で帰る姿を見ることができてとても嬉しかった。運営（手伝い）では、子どもたちに危険がないように気を使ったり、1人になる子がいないように声をかけたりと考えることが多く大変だった。しかし、体育学部の先輩方や先生方から遊びの進め方、前に出て話す際の口調や姿勢など学べたことは多かった。

最後の質問である今後に期待することは、①季節に合わせたスポーツを取り入れ、多くの遊び方を知ってほしい、②遊びの中で2人組を作る際に仲が良い友達と組む子が多くみられるので、知らない子とも組めるように声掛けをしようと思う、③大学生の参加人数を増やし、更に遊びの幅を広げたい。

5. 考察

2回のあそびゼミナールを終えて強く感じたことは、COVID-19による行動変容によって「遊び」がいかに変化したのか、また、集団で遊ぶ機会を失ったことがいかに大きかったかである。第1回（6月実施）では他参加者のことを意識してしてか、マスクを着用して参加する子どもが約半数いたこと、また、他参加者と手を繋ぐことに躊躇っている子どもが若干名であるが見受けられたことが理由として挙げられる。第2回（7月実施）では、プールでの水遊びであったため、マスク着用者は皆無であった。参加者と学生が互いに顔を見て、笑い合いながら水をかけ合い、泳ぎ・飛び込み等に没頭する姿を見て、改めて「あそびゼミナール」の必要性を強く感じた。また、あそびゼミナールが大学生に与えた影響も大きかったようである。高校生から大学生という年代で、年下の子供と遊ぶ経験が欠如してしまった大学生にとって、子供と外で思いっきり遊ぶこと、そして子供達がどんな反応をするかを感じたことは、体育学部の学生にとっても、スポーツ社会貢献プロジェクトの学生にとっても、意味があったと考えられる。

第1回に参加した保護者の意見を踏まえ、第2回より開講時間を早めに設定した（表1参照）。第1回目は家庭・学生の負担を鑑みて10時開始としたが、あそびゼミナール終了後の昼食の問題、遊び過ぎて午後の生活に支障が出るなどの貴重な意見が寄せられた。それらを踏まえ、2回目は昼食が遅くならないよう、また昼寝などの休憩が取れるように集合・解散時間を45分早めることとした。一部の保護者の声しか聞けていないが、概ね好評であったため、今後は各家庭での昼食や午後の過ごし方も考慮した上で時間を設定することとした。

今後の課題としては、参加学生の感想でもあげられていた通り、あそびゼミナールに来た子ども同士の交流があげられるだろう。仲の良い友達と遊ぶだけではなく、新しい友達を作り、様々な人と交流できるようなプログラム・仕掛け・関わり方を考える必要がある。

6. おわりに

本稿では、「あそびゼミナール」発足について、2回の活動状況報告、参加学生からの感想を列挙するにとどまった。今後は、参加している子どもたち、保護者へのアンケート調査等を実施して、「あそびゼミナール」の活動内容などを精査する必要があると思われる。また、ゼミナールと命名している以上、参加学生からの意見・感想を精査し、『子ども達と一緒に遊ぶ』だけにならない継続した学びの仕組みづくりの構築が必要だと考える。

引用文献

- 神代洋一 編著 (2012) 『コミュニケーション力を高める！レクリエーションアイデアガイド
①クラスみんなで』, 東京: 汐文社.
- 神代洋一 編著 (2013) 『コミュニケーション力を高める！レクリエーションアイデアガイド
②少人数から』, 東京: 汐文社.
- 神代洋一 編著 (2013) 『コミュニケーション力を高める！レクリエーションアイデアガイド
③身近なものを使って』, 東京: 汐文社.
- 近視予防フォーラム (2020 年) 「新型コロナウイルスによって変化した子供の生活実態」に
関する調査 <https://prtimes.jp/a/?c=60256&r=2&f=d60256-2-pdf-0.pdf>
(参照 2023 年 8 月 21 日)
- 国立青少年教育振興機構 (2018) . 「子供の頃の体験がはぐくむ力とその成果に関する調査
研究 報告書」 http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/117/File/00_report.pdf
(参照 2023 年 8 月 21 日)
- 子どもの発育・発達に及ぼす公園の利用に関する研究 (2015) .
<https://www.jpfa.or.jp/af80af7f67246e19770f9ed1d337fe4af37c273d.pdf>
(参照 2023 年 10 月 18 日)

(2023 年 12 月 26 日 受理)